

令和6年度 学校経営計画に対する最終評価報告書

石川県立金沢二水高等学校

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果（カッコ内昨年同時期結果）	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
1 学習指導： データやデジタル技術を活用して、グローバル社会で求められる資質・能力を育成する。	① データを活用することで、生徒の論理的な思考力や批判的な思考力を育成する。そのための授業の工夫を促し、研究授業等の機会を設けることで教員間で共有する。	「論理的に考えたり主張するためにデータを活用したりすることができる」の問いに対して「あてはまる」または「おおむねあてはまる」と答える生徒が A：90%以上 B：85%以上 C：75%以上 D：75%未満 新しい質問項目	11月 生徒アンケート結果 「よくあてはまる」 ：22.4% 「おおむねあてはまる」 ：53.4% 合計：75.8% 【達成度C】	・新しい質問項目であり、過年度との比較はできないが、7月のアンケート結果を比較すると、「よくあてはまる」が6%上昇していることから良い傾向であると思われる。 ・授業や探究活動の中でデータを活用し論理的に考えたり、主張したりする場面を増やす工夫をしていく。
	② 学習や部活動・学校行事などの機会を活用して、「振り返り」を導入することによって、生徒一人ひとりが自らの課題を設定し、克服しようとする力を育む。	「学校生活において、何をすべきかを自分で考えて主体的に行動している」の問いに対して「よくあてはまる」あるいは「おおむねあてはまる」と答える生徒が A：90%以上 B：85%以上 C：75%以上 D：75%未満 昨年度87.1%	11月 生徒アンケート結果 「よくあてはまる」 ：35.5%（32.2%） 「おおむねあてはまる」 ：53.7%（54.9%） 合計：89.2%（87.1%） 【達成度B】	・昨年同時期より「よくあてはまる」と答えた生徒が3.3%上昇した。 ・更なる向上のため「失敗してもいいから、とにかくやってみる」ということを授業、部活動、学校行事といったあらゆる場面で伝えていく。
	③ 適切な発表技術等を生徒に教えるとともに、自分の意見や調べたことを発言・発表できる場を授業や学校行事で設定する。	「授業を通して表現力が高まった」の問いに対して「あてはまる」または「おおむねあてはまる」と答える生徒が A：90%以上 B：85%以上 C：75%以上 D：75%未満 昨年度：88.8%	11月 生徒による授業評価結果 「あてはまる」 ：45.8%（45.2%） 「おおむねあてはまる」 ：42.8%（43.6%） 合計：88.6%（88.8%） 【達成度B】	・昨年同期より全体では0.2%下降したが、「あてはまる」と答えた生徒は0.6%上昇した。 ・各教科の授業スタイルの工夫により、授業中での発言の場面は増加している。「あてはまる」と答える生徒がさらに増加するよう、授業で心理的安全性を担保しながら、自らの考えを表現する機会を増やす等一層の工夫をしていく。
	④ オンライン学習サービスなどの個別最適化学習を支援するデジタル技術を導入し各教科で活用することで、生徒が自主的に苦手分野を克服または発展的な学習を進められる力を育む。	「デジタル教材・ツールを、自らの苦手分野の克服または発展的な学習に活用することができる」の問いに対して「よくあてはまる」あるいは「おおむねあてはまる」と答える生徒が A：80%以上 B：65%以上 C：50%以上 D：50%未満 新しい質問項目	11月 生徒アンケート結果 「よくあてはまる」 ：26.8% 「おおむねあてはまる」 ：46.9% 合計：73.7% 【達成度B】	・新しい質問項目であり、過年度との比較はできないが、7月のアンケート結果と比較すると、「よくあてはまる」が3.4%増加している一方で、「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」が2.6%増加している。この結果から、生徒が二極化しつつあることがうかがえ、デジタル教材やツールを効果的に活用できている生徒と、そうでない生徒の差が広がってきていると考えられる。 ・授業や補習、自宅学習などでより効果的に活用してもらうために、教員・生徒双方に対して活用方法やその効果についての周知を進めていく。
学校関係者評価委員会の評価		・表現力の育成については、日本文化に基づく日本社会全体の課題である。間違いを恐れて発言・表現しないのであれば、教員により褒めるなどのサポートと動機づけが必要ではないか。一方で、本校生徒はしっかりと自分の意見を表現できていると感じるので、自己評価では自身を低く捉えているだけなのかもしれない。 ・デジタルツールを活用している生徒としていない生徒が二極化しているようであるが、主体性によるものなのか、それとも家庭での環境によるものなのかを見極める必要がある。もし後者であるのなら、図書館など環境を補完する方法を教えてあげるのはひとつの解決方法であろう。		
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方針		・授業など様々な機会に生徒の表現を促すとともに、多様な意見を受容する心理的安全性を担保し、肯定的に評価することに取り組んでいく。 ・Chromebookやスマートフォンを使ってオンラインでデジタル教材を活用して学ぶ環境は整っていると考えられるので、生徒が自らの必要な学びに向かえるような主体性や課題解決力を育成する。		

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果(カッコ内昨年同時期結果)	分析(成果と課題)及び後期の扱い(改善策等)
2 進学指導： 生徒の進路意識の成熟を促し、高い目標を強い意志を持って実現する生徒を育成する。	① 将来にむけて、一人一人のキャリアビジョンの発達を促すため、さまざまな進路行事を通し、文理選択や学部学科選択、将来について広く考える機会を設ける。3か年を通して、系統だったキャリア教育を、時宜を得た適切なかたちで行う。	全学年、「前より自らの将来のキャリアについて深く考えるようになった」と答える生徒が A：75%以上 B：60%以上 C：65%以上 D：60%未満	11月 生徒アンケート結果 よくあてはまる ：52.4% (48.5%) おおむねあてはまる ：40.0% (41.5%) 合計：92.4% (90.0%) 【達成度A】	・今年度1年生は、総合的な探究の時間とも連動させ、キャリア意識の育成を図っており、系統だったキャリア教育を適切な時期に行えている。 ・今後は、将来のキャリアビジョンを将来の明確な進路目標へと生徒一人ひとりがつなげていけるよう、3年間見通したプランのもと、適切なタイミングでキャリア教育を実施できるよう準備していきたい。
	② 保護者懇談や保護者対象の進路説明会、生徒への面談を通して、生徒の進路に関して保護者と十分情報交換を行い、信頼関係を築く。 特に3年生の保護者には5月及び8月に進路説明会を行い、新課程入試について、本校の実績を踏まえて説明する。1年生の保護者には、7月に進路説明会を行い、文理選択に対する十分な情報提供を行う。	「本校の進路指導や保護者への情報提供は適切であるか」の問いに対して「よくあてはまる」または「おおむねあてはまる」と答える保護者が A：90%以上 B：80%以上 C：70%以上 D：70%未満	11月 保護者アンケート結果 よくあてはまる ：27.0% (24.5%) おおむねあてはまる ：65.0% (65.3%) 合計：92.0% (89.8%) 【達成度A】	・「合計」では2.2%増加し、過年度比較において最高の評価となっている。 ・今年度は1年生の保護者進路説明会を、文理選択に関する情報を早期に生徒・保護者に提供できるように7月に変更したことで、例年よりも1年生の保護者の割合が増加していると考えられる。 ・今後は進路説明会だけではなく、全学年に対し、HP等を活用し、進路情報の提供を行う。的確な情報提供に努め、保護者のニーズに応えたい。
	③ 担任の生徒面談や、学年集会・進路講演会・進路説明会等の各種進路行事を有効に活用し、生徒の現状を把握し、生徒の意欲を高めるとともに、具体的にやるべきことを明確にし、共有する。 難関大志望者に対し、2年次から、意識づけ・学習サポート・集団づくりを進路指導課・学年団で連携し、早期から取り組む。	①3年生の9月段階で難関大・金大を志望する生徒が A：65%以上 B：60%以上 C：55%以上 D：55%未満 ②3年生の9月段階で、生徒の学習時間(授業以外)の平均が A：週45時間以上(平日5、休日10時間換算) B：週34時間以上(平日4、休日7時間換算) C：週27時間以上(平日3、休日6時間換算) D：週29時間未満	①3年生の9月 生徒志望校調査 難関大および金大を志望する生徒 ：235名 61.7% 【達成度B】 ②3年生の9月段階で、生徒の学習時間(授業以外)の平均が ：週49.6時間 【達成度A】	・同時期9月 生徒志望校調査では、難関大および金大を志望する生徒 2年生：290名 73.4% 1年生：313名 78.1% となっている。 ・2年生は2学期に難関大説明会を開催し、学年としての集団作りを進めており、難関大希望者むけの土曜特別講座を実施している。1年生も土曜別講座で基礎力を育成する講座に加え、難関大の問題に挑戦する講座も開設している。今後も、生徒たちの進路希望を実現できるように継続してサポートしていきたい。
	④ 生徒個々の志望や学力にあわせて、各大学に応じた入試対策を補習や個別添削指導を行い、進路実績の向上を図る。 近年入試で求められる情報処理能力や表現力、思考力を高める授業へと各教員が改善する。	現役合格者数が 金沢大80以上、難関大30以上 A：両方を満たす B：どちらか一方を満たす 金沢大70以上、難関大20以上 C：両方またはどちらか一方を満たす D：両方を満たさない	今年度入試 現役合格者数 金沢大 82人 (93人) 難関大 30人 (22人) 【達成度A】	・3年生は、2年次より難関大をめざすクラスを横断する集団づくりをおこなった。その生徒たちがクラス、学年を学習集団へと牽引する役割を担い、志望変更後も難関大を目指す強い意思をもち、結果、合格につながった。 ・昨年度は震災後、金沢大を志望する生徒・保護者が増加したが、今年度は例年の傾向に戻った。そのため、結果として、金沢大への進学者が減少している。
学校関係者評価委員会の評価	・変化の激しい社会の中で、生き方を中心とするキャリア教育はあるべき姿である。それを具体的な進路志望につなげていくことが求められる。また、大学も多様な学部を創設するなど複雑化していることも明確な進路目標が定まらない要因であろう。生徒だけではなく保護者に対しても、そうした変化に対応する情報の提供が必要であろう。			
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策	・自分の強みで社会にどう貢献していくかといった軸は育てながら、その志を具体的にどのように進路目標につなげていくかを生徒に考えさせることができるよう教員も学びながら指導力を身につけていく。また、保護者に必要な情報提供ができるよう努める。			

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果（カッコ内昨年同時期結果）	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
3 生徒指導・部活動：人間形成に主眼をおいた生徒指導を行い、進学校にふさわしい部活動を追求する。	① 勉強と部活動の両立を図るために効率的な活動を追求し、生徒の学習時間の確保や、部員が勉強に主体的に取り組む姿勢をもつような指導を工夫するよう呼びかける。また、部活動で得た自信を勉学につなげ真の文武両道を目指す。	「勉強と部活動の両立ができている」の問いに対して、「よくあてはまる」「おおむねあてはまる」と答える生徒が A：80%以上 B：70%以上 C：60%以上 D：60%未満	12月 生徒アンケート結果 よく・おおむねあてはまると答えた割合 1年：76.2%（74.2%） 2年：73.1%（62.7%） 3年：—.%（—.%） 全体：75.0%（70.2%） 【達成度B】	・1年生、2年生ともに昨年に比べ値が上昇している。高校での生活にも慣れ、生徒自身が勉強と部活動を両立するという意識の現れであると考えられる。また、今年度は45分授業をベースとすることで、放課後が長くなり、可処分時間が増えたことも両立には好材料となっているのではないかと考えられる。
	② 生徒が自主的に挨拶を行うよう、生徒会等の挨拶運動を継続するとともに、教職員自らが積極的に挨拶を行うことで範を示し、教職員、生徒の自覚をさらに高める。	「挨拶はしっかり行っている」の問いに対して、「よくあてはまる」「おおむねあてはまる」と答える生徒が A：90%以上 B：80%以上 C：70%以上 D：70%未満	12月 生徒アンケート結果 よく・おおむねあてはまると答えた割合 1年：91.7%（92.5%） 2年：94.5%（90.1%） 3年：91.4%（89.6%） 全体：92.7%（90.8%） 【達成度A】	・昨年同時期より、1年生を除きやや数値が高くなっている。 ・これまで同様、生徒会のあいさつ運動、部活動での指導を継続し、生徒の自覚を高めていきたい。
	③ 本校の「いじめ防止基本方針」に基づき、いじめアンケート、個人面談・保護者懇談や学校行事等の取り組みを確実に実施することで、いじめの予防や、早期発見を行う。	「いじめ予防や早期発見、早期対策に取り組んでいる」の問いに対して、「よくあてはまる」「おおむねあてはまる」と答える教員が A：95%以上 B：90%以上 C：75%以上 D：75%未満	12月 教職員アンケート結果 よくあてはまる ：53.8%（50.0%） おおむねあてはまる ：44.6%（47.0%） 合計：98.4%（97.0%） 【達成度A】	・今年度も、学年団の迅速な面談等で、いじめにつながりかねない人間関係トラブルを把握し、その後の指導・観察等に役立てようとしている。今後も継続して取り組んでいきたい。
	④ 日頃からの生徒観察により、気づいたことを関係者が素早く共有することを全教職員が心がける。またチーム学校として連携し、的確な対応を組織的に行うシステムを構築するとともに外部機関と連携し、心身の調和を基盤とした生徒の人間形成を図る。	「先生は生徒理解に務め、生徒個人の悩みにも対応している」の問いに対して「よくあてはまる」「おおむねあてはまる」と答える生徒が A：95%以上 B：90%以上 C：80%以上 D：70%未満	12月 生徒アンケート結果 よくあてはまる ：49.2%（46.2%） おおむねあてはまる ：45.0%（49.0%） 合計：94.2%（95.2%） 【達成度B】	・配慮の必要な生徒について、教職員間で関係者との連絡を定期的に、又必要に応じてすみやかに実施しており、共通理解を図るとともに的確な対応を行っている。 ・悩みや問題を抱える生徒について、関係職員と共有し、組織的に支援していく体制を継続していきたい。 ・学年別の生徒評価を見ても、学年が上がるにつれて「よくあてはまる」の割合が高まっている。今後も継続して取り組んでいきたい。
学校関係者評価委員会の評価		・進学校にふさわしい部活動を追求することが、勝利至上主義ではなく、自分たちで目標設定をしたり合意形成しながら大切な力を育むことを目指しているのはあるべき姿として評価したい。 ・今の生徒の悩みの中で、SNSを介した人間関係のトラブルが多いように感じるが、学校としてそうしたケースの予防法や対処法などを教える機会を設けることは必要ではないか。あるいは、人間関係を修復するための方法やヒントを教えてあげる時代なのかもしれない。		
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策		・引き続き部活動が人間形成の場であることを共有し、成長のための支援を行うよう適切な部活動運営に取り組む。 ・現在でも、SNSをめぐるトラブルについては、学年集会等の機会を利用して注意を促すなど指導してきた。また、SOSの出し方やメンタルヘルスについても同様の機会を設けている。こうした教育を継続するとともに、教員が高いアンテナを持ち組織的に生徒の悩み等に対応できるよう努める。		

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果（カッコ内昨年同時期結果）	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
4 学校組織：業務の効率化を進め、高い専門性と広い見識に基づいた協働的な教育活動を追求する。	<p>R6年度より、45分授業を日課の基本と変更することで放課後の可処分時間を増やすことや、機械警備の開始時間を30分繰り上げることによって、より一層タイムマネジメントの意識を高めるとともに、ワークライフバランスを推進することで、教育活動の質を高める。</p> <p>STEAM教育やDXなどのプロジェクトを推進することにより、求められる教育のアップデートをはかり、自己研鑽や協働の機運を醸成する。</p>	<p>①「効率化やタイムマネジメントを意識した業務の遂行に努めている。」の問いに対して「よくあてはまる」「おおむねあてはまる」と答える教員が、 A：85%以上 B：75%以上 C：60%以上 D：60%未満</p> <p>②「社会の変化を意識して、新しい教育に意欲的に挑戦している」の問いに対して「よくあてはまる」「おおむねあてはまる」と答える教員が、 A：85%以上 B：75%以上 C：60%以上 D：60%未満</p>	<p>①12月 教職員アンケート結果 よくあてはまる ：32.3%（27.3%） おおむねあてはまる ：55.4%（57.6%） 合計：87.7%（84.9%） 【達成度A】</p> <p>②7月 教職員アンケート結果 よくあてはまる ：40.0%（29.2%） おおむねあてはまる ：50.8%（60.0%） 合計：90.8%（89.2%） 【達成度A】</p>	<p>①</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「よくあてはまる」「おおむねあてはまる」と答える教員が87.7%と、昨年同時期より2.8ポイント増加した。 ・今年度は日課表を45分授業を中心としたものに改訂し、可処分時間が生徒とともに教員にも増やしたこともあり、退校時間は確実に早くなっている。今後、こうした改革の理念を忘れないようにしながら、引き続き効率的な業務改善を続けていくよう努めていく。 <p>②</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「よくあてはまる」「おおむねあてはまる」と答える教員が90.8%と、昨年同時期より1.6ポイント増加した。 ・STEAM教育推進モデル校に加えて、今年度DXハイスクールの指定を受け、教員間に新しい教育への意識が浸透、挑戦への機運も醸成してきている。
学校関係者評価委員会の評価	<p>・働き方改革として時間外勤務を短くしようとする一方で、新しい教育改革への取組のために学ぶことを求めることを、どうやって両立していくのか、考えていくことが求められるし、まだまだ時間外勤務は短くすべきである。</p>			
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策	<p>・教育に関する新しい取組が増えていく中で、そうしたことに挑戦できるようにするためにもスクラップすべきことを見つけ出して、時間的・精神的な「余白」を創り出せるよう工夫していく。</p>			